

+ 29 【きめんとう】

あるとき、懐爺にこんなことをきいてみました。

「おばけは、どれくらい、いるんかのう」

懐爺はかんがえこむふうにしてから、

「〈百鬼夜行（ひゃっきやこう）〉といいましてね、鬼だけで百はいるといわれています。それも、

鬼畜、

鬼神、

鬼面、

鬼人、などはまた別です。他にいまおもいつくだけでも、

妖怪、

妖異、

妖気、

怪異、

怪奇、

変化、

化身、

怪人、

怪物、

怪獣、

幽霊、

生霊、

死霊、

物霊、

幽魂、などなどの種類がありますから、それぞれ百としても、二千近くはいますねえ。ちなみに、わかりにくいおばけのみ説明します。『日本妖怪変化史』の著者、江馬務（えまつとむ）によりますと、幽霊は死んで後、そのうつせみの姿を現して活動するもの、死霊は死んで後、その精霊が仮の姿を見せないで活動するもの、生霊はその人の生存中にその精霊が遊離して活動するものであるそうです。おばけはこれらだけではありません。無化（むけ）、つまり、おばけではないのに、おばけとおもい

こんだりかんちがいするものも、おばけに含むとしたら、一万、いえいえ森羅万象（しんらばんしょう）おばけだらけ、ということになります」

「むけたあ、なんじゃ。おばけでないおばけとは、なんじゃ」

「たとえば金ちゃんが赤ちゃんだったころ、

燃え上がる火とか、

跳ね上がる水とか、

弾け飛ぶ土とか、

揺れ動く木とか、

を初めて見て、言葉は知らずとも、おばけだとおもったことでしょう。

たしかに赤ちゃんにとっては、それらは尋常（じんじょう）なものではないから、おばけなんでしょう。そういうことはおとなになってもあるわけですし、本人が、あれはおばけだと言い張ったら、他人は無碍（むげ）に反対はできないものなんでしょうね」

相変わらず懐爺の話は説得力がある。

「そんじゃ、かいじいにとって、その〈むけ〉というおばけはどういうもんかのう」

懐爺は何か意味ありげな表情をしつつ、

「正直いってもいいですかね。わたしにとって無化の代表は、金ちゃんですよ」

「わしが、〈むけ〉おばけかい」

意外だったので大声をだしました。

「はい。おそらく金ちゃんは、わたしのことを無化おばけだとおもっているでしょう。同じ意味で、わたしは金ちゃんのことをそうおもっているんです」

「かいじいとわしは、おばけなかまかい」

何となく嬉しい気分でした。

おばけにされることが、ではなく、懐爺と仲間にもされたことが、嬉しかったのです。

「理由はいくつもありますが、ひとつだけお伝えしましょう。金ちゃんはいま、わたしと仲間であることを、喜んでくれていますね。そういう金ちゃんが、わたしにとっては、ありがたくありえない、おばけなんですよ」

「〈むけ〉おぼけは、じゅんすいなおぼけなんじゃのう」

おもわず呟いたぼくに、懐爺はゆっくりと首をふりました。

「ところがその無化おぼけを騙（だま）すおぼけがいましてねえ。あえて単純にいいますと、おぼけに対して、おぼけを悪用するおぼけといいましようか。これも無化おぼけですが、おぼけのなかで一番たちの悪いおぼけでしょうね」

「ややこしいおぼけじゃのう。たとえばどんなおぼけかのう」

「たとえば、【きとう】というおぼけで、これが一番たちが悪い」

「おにのあたまかい。かめのあたまかい」

「祈祷（きとう）というお祈りをするおぼけです。無化おぼけを見つけると、あんたは恐ろしいおぼけに祟（たた）られているよ、そのおぼけを、祈祷で退治してあげるから、お金を持ってきなさいよという、詐欺（さぎ）のおぼけですよ。靈感商法（れいかんしょうほう）というものと結びついていて、おぼけの風上にもおけないので、おぼけの世界から村八分になったおぼけですね。こういうと【おんみょうじ】を思い起こすでしょうが、似て非なるものです。この【きとう】は大金を騙し取るためなら、口八丁手八丁でどんなことでもやってくる、しつこいおぼけなのです」

「だまされるほうが、わるいんじゃないのかのう」

「何せ、おぼけ仲間であることを強調してやってきますから、おぼけを信じる無化おぼけは、必ず騙されます」

「そんなもんかのう」

「たとえばわたしが、金ちゃんのおぼけ仲間であるわたしが、金ちゃんに、あなたは悪いおぼけに取り付かれているから、お金をいっぱいもってくれば悪いおぼけを退治してあげるよといったら、きっと金ちゃんはお金を持ってくるでしょう」

「それはそうじゃのう。ほかならぬかいじいにいわれてはのう。わしはかねはないから、かねのかわりに、わしがたからものにしてている、かぶとむしのおもちゃを、かいじいにあげるとするかのう」

「そうなんです、【きとう】の姑息（こそく）なところは、甲虫にはちっとも目をつけずに、黄金虫にしか目をつけないということですね」

「ほんじゃ、そんなしょうがあぶないのう」

「村長が無化おぼけだとしたなら、危ないですね」

「かいじいは、その【きとう】に、あったことがあるんかい」

「あったといえますか、なかったといえますか」

懐爺は言葉を濁しました。

ぼくはこのときなぜだか、懐爺のこどものころ、あるいは若いころを知りたくなって、たまらなくなりました。

それで、また別の日のあるとき、村長さんにこうきいてみました。

村長さんはこども好きで有名ですから、すこしも遠慮（えんりょ）はしませんでした。

それでも、村長さんが暇そうに散歩しているところをねらいました。

「かいじい、いや、ほこらのじいの、わかいころをしっとるかのう」

村長さんは真面目な老人なので、答えるべきか答えぬべきか、悩んでいるふうでした。

こどもにもわかる表情でしたので、

「しらんならええ。けどもし、しっとるなら、おしえてもいいことだけを、おしえてくれんかのう」

そういうと、村長さんの表情が変わりました。

「わしゃ年だけはとっとるけどね。あのひととは若いころ付き合いがなかったから、噂くらいしかしらんが、それでよければ話してあげようかい」

「それでええ」

ぼくの心臓がどっくんと鳴りました。

村長さんは道端の石の上に腰をおろして、改まった口調で話し始めます。

「あのひとは、村では〈ばけもの〉と呼ばれていたな。なぜって、とても怖い顔をしていて、ひどく汚い身なりをしていたもので。そればかりか、いつ勉強しいつ修行したのか、博覧強記（はくらんきょうき）武芸百般（ぶげいひゃっぱん）ということで、そのころの有力者たちは、つまり、村長とか医者とか神主とか僧侶とかだが、あのひとを文武の師匠（ししょう）兼用心棒（ようじんぼう）にしていたもんよ。もちろん、だれもあのひとの腕前を見たことがなかったもんだから、信用していた

者はほとんどいなかったな。だから有力者たちは、あのひとの噂に少々
の金を出したってことさな。それに〈ばけもの〉がいるところには、い
くら悪党でも寄り付かんだろうと考えていた。そして、あの日がきたっ
てわけさ」

ここで村長さんは大きく息を吸いました。

「わしゃまだ少年だったから、最初から最後まで見ざる聞かざる言わざ
るでよ、なさけなかったもんだが。よってこれは、あくまでも後からき
いた噂ってことで、いいかいな。あの日、寺に山賊（さんぞく）が押し
入ってな。【きめんとう】といってな、みんな鬼の面をかぶった、おぼけ
山賊といわれていた連中。いまの山寺でのうて、あのころはいまの小山
になかなか立派な寺があったのよ。その【きめんとう】が、たしか七人
といていたな、連中が住職を殺し、金目のものを盗んで、寺に火をつ
けた。あのひとはそのとき、神社の用心棒をしていたんだが、火を見て
すっ飛んでいった」

村長さんはここで一息つきました。

「そんで、どうなったのかのう」

ぼくはせかせた。

「焼け落ちた寺の周りに、七人の【きめんとう】の骸（むくろ）が横た
わっていたとよ」

「それは、ほこらのじいにやられたんか」

「目撃者がひとりだけいて、それは寺にやってきた雲水（うんすい）だ
ったんだが、あのひとは焼け落ちた寺の、焼け焦げた欄干、一本掴むと、
それこそ雲水が瞬きしている間に、山賊七人を殴り殺したという」

「それはすごいのう。それはりっぱじゃのう」

懐爺の若いころなら、そんなことは朝飯前だろうと、ぼくは胸中で喜
悦（きえつ）しながらかんがえました。

「たしかにすごいが、りっぱではないな」

「どうしてじゃ」

ぼくは不満だったが、村長さんの話に耳を傾けました。

「村びとが後かたづけに行ったんだが、【きめんとう】の殺され方を見て、
みんな嘔吐（おうと）してしまったのよ。脳天をかち割られて脳味噌が
吹き出した者、首を叩き飛ばされた者、睾丸と金玉を叩き潰された者、

目玉が百米もすっ飛んだ者、手や足がどこに飛んだかわからない者など」
「ぼうさんをころしたんじゃから、むくいじゃのう」

そういうしかなかった。

「そう思う村びとは、まったくいなくってな。というのはまず、住職が金の亡者（もうじゃ）で、檀家にすら評判が悪くてな。その坊さんを殺したからといって、仮に死刑になっても、絞首刑さな。それが、こんな残虐な殺され方があるまい、というのが、みんなの意見だった」

「〈ばけもの〉が〈おばけ〉をころしたんじゃから、もんだいなかろうに」

「それが、【きめんとう】には、家から追い出され、喰いっぱぐれた、村の三男坊が何人かいて、その兄貴たちも、複雑な思いだったわけよ」

「けいさつは、さいばんは、どうなったんか」

「正当防衛ってやつで、あのひとは罰せられなかったがさ。なにはともあれ、〈七人殺し〉の肩書きが付いていますから、村びとにとって、あのひとに対して、いっそう〈ばけもの〉感が強くなるばかりになったのは、わしゃやむをえない気がするな。それであのひとは、次第次第に、村八分（むらはちぶ）となっていくたのよ」

「それからずっと、ほこらかい」

「村八分になったあのひとに、前の前の村長が同情してな。なにもかも失ったあのひとに、祠と生活必需品と幾許（いくばく）かの食費を提供したってわけさ。だがそれも半世紀以上前の話だからね。それからのあのひとがどうしているかは、だれもわからない。わかろうともしない。いえ、聞くところによると、金ちゃんだけはわかってるようだねえ」

村長さんは慈しむ眼でぼくを見た。

「あたらずとも、とおからずじゃ」

「そうそう、これはずいぶん後になってわかったことですがね、【きめんとう】は【きとう】というおばけでもあって、寺の住職と組んで、多額の金銭を村びとから騙し取っていたとのことさ。住職がその金を一人占めにしようとしたので、襲いかかったとのことだったな」

そうか、そうか。

ぼくは無言でうなづいたものでした。